

[15] 2-エトキシエタノール

1. 物質に関する基本的事項

(1) 分子式・分子量・構造式

物質名：2-エトキシエタノール (別の呼称：エチルグリコール、エチレングリコール、モノエチルエーテル、エチルグリコール、エチルセロソルブ) CAS 番号：110-80-5 分子式：C ₄ H ₁₀ O ₂ 分子量：90.1 構造式：	
--	---

(2) 物理化学的性状

本物質は無色の液体である¹⁾。

融点	-70 (流動点) ²⁾
沸点	135 (760mmHg) ³⁾
比重	0.931(20/20) ⁴⁾
蒸気圧	5.31mmHg(25) ⁵⁾
換算係数	1ppm=3.75mg/m ³ (気体、20) ⁶⁾
n-オクタノール/水分配係数 (log Pow)	-0.32 ⁷⁾
加水分解性	文献なし ⁶⁾
解離定数	pKa=14.8 ⁸⁾
水溶性	混和 ⁹⁾

(3) 環境運命に関する基礎的事項

本物質の分解性及び濃縮性は次のとおりである。

分解性 好氣的：良分解 ¹⁰⁾ 嫌氣的：報告なし ⁶⁾ 非生物的： (OH ラジカルとの反応性)：水中での速度定数を 1.0×10^9 L/分子・sec で、OH ラジカル濃度を 1×10^{-17} M とした時の半減期は 2.2 年(pH9)と計算される ¹¹⁾ 。大気中での速度定数を 1.2×10^{-11} cm ³ /分子・sec(25)で ¹²⁾ 、OH ラジカル濃度を 5×10^5 分子/cm ³ とした時の半減期は約 32 時間と計算される ¹²⁾ 。 BOD から算出した分解度： 63 ~ 83% (試験期間：2 週間、被験物質：100mg/L、活性汚泥：30mg/L) ¹⁰⁾ 生物濃縮係数 (BCF)：3.162(計算値) ¹³⁾
--

(4) 製造輸入量及び用途

生産量・輸入量等

本物質の平成 8 年度における製造量等は 8,596t であり、その内訳は製造量が 6,906t、輸入量が 1,690t である¹⁴⁾。また、OECD に報告している生産量は 1,000 ~ 10,000t である。

用途

本物質の主な用途は、各種樹脂溶剤、医薬用抽出剤である¹⁵⁾。

2. 暴露評価

環境リスクの初期評価のため、水生生物の生存・生育を確保する観点から、実測データをもとに基本的には特定の排出源の影響を受けていない一般環境等からの暴露を評価することとし、安全側に立った評価の観点からその大部分がカバーされる高濃度側のデータによって暴露量の評価を行った。原則として統計的検定の実施を含めデータの信頼性を確認した上で最大濃度を評価に用いている。なお、多数のデータが得られている場合は、95 パーセンタイル値を参考として併記している。

(1) 環境中分布の予測

2-エトキシエタノール当該化学物質の環境中の分布について、各環境媒体間への移行量の比率を EUSES モデルを用いて算出した結果を表 2.1 に示す。なお、モデル計算においては、面積 2,400km²、人口約 800 万人のモデル地域を設定して予測を行った¹⁾。

表 2.1 2-エトキシエタノールの各媒体間の分布予測結果

		分布量 (%)
大	気	0.08
水	質	61.4
土	壤	0.8
底	質	37.7

(2) 各媒体中の存在量の概要

2-エトキシエタノールの水質及び底質中の濃度について情報の整理を行った。各媒体ごとにデータの信頼性が確認された調査例のうち、より広範囲の地域で調査が実施されたものを抽出した結果を表 2.2 に示す。

表 2.2 2-エトキシエタノールの水質、底質中の存在状況

媒体	幾何平均値	算術平均値	最小値	最大値	検出下限値	検出率	調査地域	測定年	文献
公共用水域・淡水 $\mu\text{g/L}$	< 0.9	< 0.9			0.9	0/65	全国	2000	2
公共用水域・海水 $\mu\text{g/L}$	< 0.9	< 0.9			0.9	0/11	全国	2000	2
底質 (公共用水域・淡水) $\mu\text{g/g}$	<400	<400			400	0/4	全国	1976	3

(3) 水生生物に対する暴露の推定 (水質に係る予測環境中濃度: PEC)

2-エトキシエタノールの水生生物に対する暴露の推定の観点から、水質中濃度を表 2.3 のように整理した。水質について安全側の評価値として予測環境中濃度 (PEC) を設定すると、公共用水域の淡水域では $0.9\mu\text{g/L}$ 未満、同海水域でも同様に $0.9\mu\text{g/L}$ 未満となった。

表 2.3 水質中の 2-エトキシエタノールの濃度

媒体	平均濃度	最大値等濃度
	水質	
公共用水域・淡水	$0.9\mu\text{g/L}$ 未満 (2000)	$0.9\mu\text{g/L}$ 未満 (2000)
公共用水域・海水	$0.9\mu\text{g/L}$ 未満 (2000)	$0.9\mu\text{g/L}$ 未満 (2000)

注) : 公共用水域・淡水は、河川河口域を含む。

3. 生態リスクの初期評価

生態リスクの初期評価として、水生生物に対する化学物質の影響 (内分泌攪乱作用に関するものを除く) についてのリスク評価を行った。

(1) 生態毒性の概要

本物質の水生生物に対する影響濃度に関する知見の収集を行い、その信頼性を確認したもののについて生物群、毒性分類別に整理すると表 3.1 のとおりとなる。

表 3.1 生態毒性の概要

生物種	急性	慢性	毒性値 [$\mu\text{g/L}$]	生物名	エンドポイント /影響内容	暴露期間 [日]	信頼性			Ref. No.
							a	b	c	
藻類			100,000	<i>Anacystis aeruginosa</i>	TT POP	8				15134
			>10,000,000	<i>Scenedesmus quadricauda</i>	TT POP	8				15134
甲殻類			<u>1,900,000</u>	<i>Ceriodaphnia dubia</i>	EC ₅₀ IMM	2				18991
魚類			> <u>5,000,000</u>	<i>Carassius auratus</i>	LC ₅₀ MOR	1				623
			>10,000,000	<i>Lepomis macrochirus</i>	LC ₅₀ MOR	4				863
			>10,000,000	<i>Menidia beryllina</i>	LC ₅₀ MOR	4				863
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

太字の毒性値は、PNEC 算出の際に参照した知見として本文で言及したものの、下線を付した毒性値は PNEC 算出の根拠として採用されたものを示す。

信頼性) a : 毒性値は信頼できる値である、b : ある程度信頼できる値である、c : 毒性値の信頼性は低いあるいは不明

EC₅₀(Median Effective Concentration): 半数影響濃度、LC₅₀(Median Lethal Concentration): 半数致死濃度、TT(Toxicity Threshold): 増殖阻害初期濃度
 影響内容) IMM (Immobilization): 遊泳阻害、MOR (Mortality): 死亡、POP (Population): 個体群の変化

(2) 予測無影響濃度 (PNEC) の設定

急性毒性値及び慢性毒性値のそれぞれについて、信頼できる知見のうち生物群ごとに値の最も低いものを整理し、そのうち最も低い値に対して情報量に応じたアセスメント係数を適用することにより、予測無影響濃度 (PNEC) を求めた。

急性毒性値については、甲殻類では *Ceriodaphnia dubia* に対する遊泳阻害の 48 時間半数影響濃度 (EC₅₀) が 1,900,000 µg/L、魚類では *Carassius auratus* に対する 24 時間半数致死濃度 (LC₅₀) が 5,000,000 µg/L 超であった。急性毒性値について 2 生物群 (甲殻類及び魚類) の信頼できる知見が得られたため、アセスメント係数として 1,000 を用いることとし、上記の毒性値のうち最も低い値 (甲殻類の 1,900,000 µg/L) にこれを適用することにより、急性毒性値による PNEC として 1,900 µg/L が得られた。

慢性毒性値については、信頼できるデータが得られなかった。

本物質の PNEC としては、甲殻類の急性毒性値をアセスメント係数 1,000 で除した 1,900 µg/L を採用する。

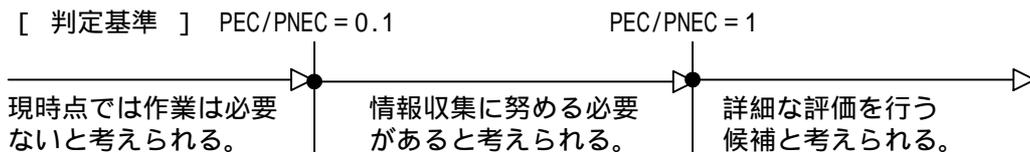
(3) 生態リスクの初期評価結果

表 3.2 生態リスクの初期評価結果

媒体		平均濃度	最大値[95 パーセンタイル値]濃度 (PEC)	PNEC	PEC/PNEC 比
水質	公共用水域・淡水域	0.9µg/L未満 (2000)	0.9µg/L未満 (2000)	1,900 µg/L	<0.0005
	公共用水域・海水域	0.9µg/L未満 (2000)	0.9µg/L未満 (2000)		<0.0005

注) : 1) 環境中濃度での () 内の数値は測点年を示す。

2) 公共用水域・淡水は、河川河口域を含む。



本物質の公共用水域における濃度は、平均濃度でみると淡水域・海水域共に 0.9 µg/L 未満であり、検出下限値未満であった。安全側の評価値として設定された予測環境中濃度 (PEC) も、淡水域・海水域共に 0.9µg/L 未満であり、検出下限値未満であった。

予測環境中濃度 (PEC) と予測無影響濃度 (PNEC) の比は、淡水域では 0.0005 未満、海水域では 0.0005 未満となるため、現時点では新たな作業は必要ないと考えられる。

4 . 引用文献等

(1) 物質に関する基本的事項

- 1) NIOSH. NIOSH Pocket Guide to Chemical Hazards. DHHS (NIOSH) Publication No. 94-116. Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, June 1994. 130. [Hazardous Substances Data Bank (以下、HSDB)]
- 2) Kirk-Othmer Encyclopedia of Chemical Technology. 3rd ed., Volumes 1-26. New York, NY: John Wiley and Sons, 1978-1984.,p. V11 944 (1980). [HSDB]
- 3) Lide, D.R. (ed.). CRC Handbook of Chemistry and Physics. 75th ed. Boca Raton, Fl: CRC Press Inc., 1994-1995.,p. 3-159. [HSDB]
- 4) Budavari, S. (ed.). The Merck Index - Encyclopedia of Chemicals, Drugs and Biologicals. Rahway, NJ: Merck and Co., Inc., 1989. 592. [HSDB]
- 5) Daubert, T.E., R.P. Danner. Physical and Thermodynamic Properties of Pure Chemicals Data Compilation. Washington, D.C.: Taylor and Francis, 1989. [HSDB]
- 6) 財団法人化学物質評価研究機構(1998)：化学物質安全性(ハザード)評価シート
- 7) Hansch, C., Leo, A., D. Hoekman. Exploring QSAR - Hydrophobic, Electronic, and Steric Constants. Washington, DC: American Chemical Society., 1995. 10. [HSDB]
- 8) Riddick, J.A., W.B. Bunger, Sakano T.K. Techniques of Chemistry 4th ed., Volume II. Organic Solvents. New York, NY: John Wiley and Sons., 1985. 1325. [HSDB]
- 9) Flick, E.W. (ed.). Industrial Solvents Handbook 4 th ed. Noyes Data Corporation., Park Ridge, NJ., 1991. 555. [HSDB]
- 10) 通産省化学品安全課監修, 化学品検査協会編, 化審法の既存化学物質安全性点検データ集, 日本化学物質安全・情報センター(1992).
- 11) Anbar M, Neta P; Int J Appl Rad Isot 18: 493-523 (1967). [HSDB]
- 12) Atkinson R; Journal of Physical and Chemical Reference Data. Monograph No 1 (1989). [HSDB]
- 13) BCFWIN v2.14
- 14) 平成 8 年度既存化学物質の製造・輸入量に関する実態調査, 通商産業省. [財団法人化学物質評価研究機構(1998)：化学物質安全性(ハザード)評価シート]
- 15) 化学工業日報社(2002)：14102 の化学商品

(2) 暴露評価

- 1: (財)日本環境衛生センター 平成 13 年度化学物質の暴露評価に関する調査報告書(環境庁請負業務)
- 2: (株)住化分析センター：平成 1 2 年度水環境に係る要調査項目存在状況調査報告書(環境庁請負業務)、平成 1 3 年
- 3: 環境庁保健調査室：昭和 52 年版化学物質と環境

(3) 生態リスクの初期評価

- 1) データベース：U.S.EPA「AQUIRE」
- 2) 引用文献(Ref. No.：データベースでの引用文献番号)

- 623 : Bridie, A.L., C.J.M. Wolff, and M. Winter (1979) : The Acute Toxicity of Some Petrochemicals to Goldfish. *Water Res.* 13(7):623-626.
- 863 : Dawson, G.W., A.L. Jennings, D. Drozdowski, and E. Rider (1977) : The Acute Toxicity of 47 Industrial Chemicals to Fresh and Saltwater Fishes. *J.Hazard.Mater.* 1(4):303-318.
- 15134 : Bringmann, G., and R. Kuhn (1978) : Testing of Substances for Their Toxicity Threshold: Model Organisms *Microcystis (Diplocystis) aeruginosa* and *Scenedesmus quadricauda*. *Mitt.Int.Ver.Theor.Angew.Limnol.*21:275-284.
- 18991 : Rose, R.M., M.S.J. Warne, and R.P. Lim (1998) : Quantitative Structure-Activity Relationships and Volume Fraction Analysis for Nonpolar Narcotic Chemicals to the Australian Cladoceran *Ceriodaphnia*. *Arch.Enviroin.Contam.Toxicol.* 34(3):248-252.